Akita University

初任英語教師の１年の振り返り：コミュニケーション活動編

仙北市立角館中学校　佐藤 栞夏

＜はじめに＞

教員採用試験に合格し、4 月から教壇に立ち、怒濤の毎日の中で、英語の授業を行なってきた。昨年までは、大学生活を満喫しながら、どんな英語の授業をしようかと想像を膨らませていた。しかし、実際の教育現場は想像とは異なる部分も多く、あれだけ楽しみにしていた英語の授業の準備も、満足いくまでできないこともあった。それでも、時がたつにつれて、生徒の反応から手応えを感じる瞬間も増えており、今も理想の英語授業に近づこうと試行錯誤している。

私が勤務する角館中学校では、-角中の約束-として「相手の感じ方を創造しながら行動したり話したりする」を掲げている。これを受けて、英語科では「お互いの個性や考えを認め合い、相手の感じ方を想像しながらコミュニケーションを継続できる能力の育成」を研究主題とし、日々の英語の授業における言語活動の充実を図ってきた。今回は、この目標に基づいた、この１年での取り組みと今後の課題について紹介する。

＜クラスと授業について＞

今年度は１年生の３クラスを担当している。どのクラスも元気がよく、反応もよい。小学校での外国語活動を楽しかったと感じている生徒が多く、中学校の英語の授業でのコミュニケーション活動に積極的に取り組んでいる。英語で話す場面、特に、ALT と１対１で会話する場面や様々なイベントや歴史に関する英語でのクイズには意欲的に参加している。また、他の生徒よりも先に答えようと必死になったり、覚えた英語を積極的に使おうとしたりする姿も見られ、活発な授業になっていると感じている。

その中で、「英語で会話したいけれど、相手が言った言葉にどう反応すればいいか分からない」「会話が続けられない」「ALT に話しかけられても、言っていることは分かるけど、“oh”と“wow”しか言えない」という相談をした生徒がいた。そこで、会話を続けるためにはどうすればよいかについて、クラスごとに考え、スラスラコミュニケーションを行なうためのポイントとして「スラコミポイント」を作成した。

＜各クラスのスラコミポイント＞

「英語で会話をする際に、スラスラコミュニケーションをつなげるためには」という視点で、必要だと感じることを挙げ、まとめた。また、全クラス共通で小学校から使っ

Akita University

ている Picture Dictionary (東京書籍, 2020)から有効な「反応の仕方」を抜粋し、合わせて提示している。加えて、全クラス共通である「質問する」をより効果的にするために、NEW HORIZON 1 Unit 4 までに出てきた疑問詞(what, who, how, where, when)も短冊にして提示した。

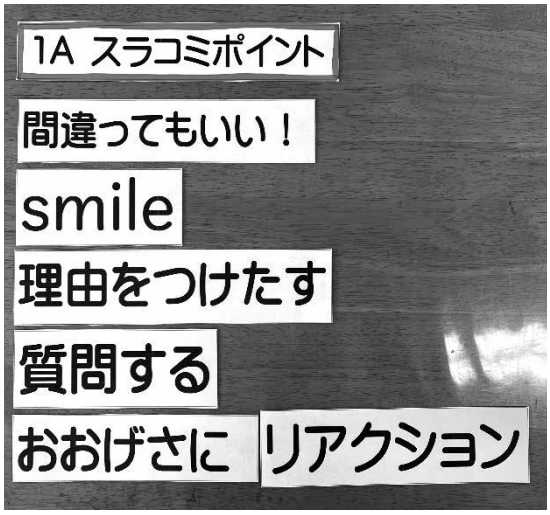

図１　１年 A 組のスラコミポイント

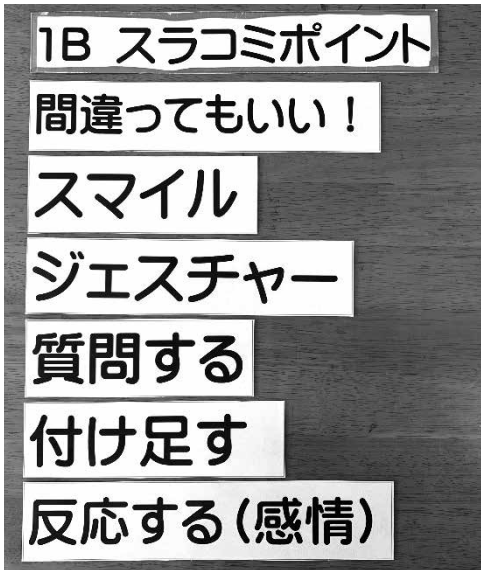

図２　１年 B 組スラコミポイント

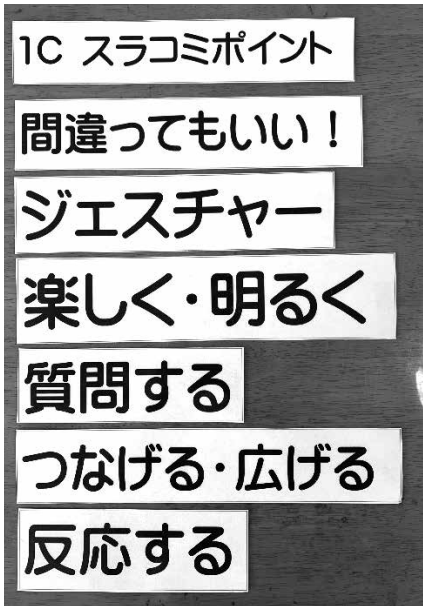

図３　１年 C 組スラコミポイント

図４　反応例[Picture Dictionary より抜粋]

＜実践例＞

今は、帯活動でのコミュニケーション活動としてスラコミポイントを取り入れているが、本稿では作成したポイントを意識して実践するために取り組んだ、文法導入の授業

Akita University

実践について紹介する。
NEW HORIZON 1 Unit 4 Part 2 Friends in New Zealand

＜単元とスラコミポイント活用場面について＞
　生徒達は４つの小学校から入学している。入学して２ヶ月が経ち、お互いに慣れてきた頃であったが、生徒たちは「初めて同じクラスになった」「もともと知っていたけど、詳しくは知らない」という思いをもっていた。そこで、「クラスメイトの好きなものを深掘りする」というねらいのもとに、インタビュー活動を行なった。相手の好きなものを知るためには前時に学んだ「What 名詞 do you like?」を使えばよいのではないかという意見をクラスで採用し、ペアで質問をし合った。

＜授業の流れ＞
①スラコミポイントを確認する。
②ペアでＡとＢに分かれてインタビュー活動を行う。
③A：質問する(What △△ do you like?)→Bさんの答えに反応する→広げる質問(必要な疑問詞を選んで質問する)
　B:Aさんの質問に答える
④言いたかったけど言えなかった表現を全体で確認する。
⑤ペアを変えてインタビューをする。

＜実際に授業を行なって＞
・始めは、文章を完璧に言おうとして、お互いに無言で時間が過ぎるペアもあったが、繰り返しインタビュー活動をし、スラコミポイントを意識するように声かけをすることで、ジェスチャーや感情的な反応をしながら、相手に伝えたい、相手を知りたいという気持ちをもって、つなげようとする姿勢がみられた。
・「言いたかったけど言えなかった表現」を確認することで、表現を貯めていくことができ、回数を重ねるごとに、やりとりの回数が増えていた。
・質問する側だけでなく、答える側もスラコミポイントを意識し、答えにもう１文付け足そうと挑戦している生徒も見られた。

＜スラコミポイントの活用における一年の振り返り＞
・１年間を通して活用することで、質問する→反応する→質問するというやりとりの回数が増えてきた。
・ALT との会話の中でも“oh”や“wow”だけだった生徒が“Really?”や“How about

Akita University

you?”も組み込んで反応する場面があった。

・「リアクションをすると相手も気まずくないし、楽しい英語になる」「英語が話せる気分になって、家族に自慢できる」「普段の生活でもたまに使えた」「会話が続くと達成感がある」という前向きな感想が得られた。
・スラコミポイントを意識するとスキット練習の時に棒読みにならない。
・「間違ってもいいや」といいながら挑戦する生徒が増えた。
・ポイントがありすぎて、覚えることができないという感想もあったことから、ポイントや提示する反応を厳選したものを作成する必要がある。または、活動毎に「今日頑張るポイント」という視点を絞って、徐々に増やしていくことも有効だと考える。

＜成果と今後に向けて＞

１年間英語の授業をしてみて、継続することで身に付くこと、慣れることでスムーズに取り組むことができるようになることなどの、生徒の変容を長いスパンで見取ることを経験した。これは、大学での短期間の教育実習ではあまり経験できないことであり、今年１年の収穫でもある。今回は、相手を意識したコミュニケーションの基礎固めをしたが、これからはスラコミポイントにオリジナリティーを加え、生徒が実際の生活での会話にも生かせるような授業をしたい。そのために、反応の仕方についても、ALT との会話やデモンストレーションの中で種類豊富な反応の仕方を提示しながら、工夫していきたい。また、学年が上がるにつれて、扱われる文法や文章量が増える中でも、生徒が楽しくコミュニケーション活動に取り組むことができるように、私自身も研究と修養を継続していきたい。そして、ただ活動して終わるのではなく、定着させ、将来に役立てるような指導につなげていきたい。

相手を知りたい、会話をつなげたいという気持ちは、言語に関わらず、コミュニケーション活動の基礎となる。必要だと分かっていても、実際に行動に移すことは難しいということは私自身も英語の学習を進める上で感じてきた。英語学習者として感じたことを生かしながら、生徒の疑問に寄り添い、よりよい学びにつなげていきたい。そして、SNS などの顔が見えなくても繋がったり、たくさんの造語や省略した言葉でやり取りをしたりできる時代を生き抜く子どもたちが、言葉を介して、相手への思いやりをもったコミュニケーションをし、自己発信していけるように、支えられる教師を目指していく。